

なかみなとはんしゃろあと  
**那珂湊反射炉跡**

—水戸藩の鉄製大砲製造所—



◆ 遺跡の位置

那珂湊反射炉跡は、ひたちなか市の南東部、ひたちなか海浜鉄道湊線那珂湊駅の南西方 400m の那珂川を見下ろす「吾妻台」と呼ばれる小高い丘に位置し、栄町一丁目のあづまが丘公園内に所在しています。那珂湊駅から徒歩で約 15 分です。

◆ 遺跡の由来・沿革

江戸時代の日本は鎖国を行っていましたが、幕末になると日本近海に外国の船が頻繁に出現するようになりました。水戸藩内においても文政 7(1824)年の大津浜(北茨城市)でのイギリス捕鯨船員の上陸事件等、異国船の出没事件が起こるようになってきました。このため、水戸藩第 9 代藩主徳川斉昭公は、水戸藩内の海岸の防備の必要性を強く感じ、異国船を打ち払うための大砲を製造することになりました。

しかし、水戸藩など当時の日本で製造していた大砲は、溶解温度が低い銅を材料とした青銅製の臼砲(餅つきの臼のような形をした砲身の短い大砲)であり、射程距離が短く威力に乏しいため、異国船の装備と比べて性能的に明らかに劣っていました。異国船の攻撃に適した高性能の鉄製の鉄製の大砲を製造するためには、大量の鉄を溶解する炉(金属溶解炉)である反射炉が必要で、西洋(オランダ)の技術を導入し、先行して事業化した佐賀藩などの諸藩に学んで建設されました。

反射炉は、燃料と金属材料を別の区画に投入し、炎が直接材料に当たらないように炎の熱を反射させて、その熱で金属を溶解することから、「反射炉」の名称がつけられました。

◆ 遺跡の性格

那珂湊は水戸へも近く、回船業の重要港であり、原材料・燃料の調達や江戸への輸送に便利であるため、反射炉の建設地として選定されたと考えられます。那珂湊反射炉は、水戸藩営事業の鉄製大砲製造所として建設された。

水戸藩は、当時の反射炉を知る第一人者である南部藩士の<sup>たかとう</sup>大島高任や三春藩士<sup>くまだかもん</sup>熊田嘉門、薩摩藩士<sup>せいうえもん</sup>竹下清右衛門を招き、那珂湊の大工<sup>よしち</sup>飛田与七に反射炉の建設を命じて、安政元(1854)年に着工し、同2年に第1炉(西炉)が完成し、同4(1857)年に第2炉(東炉)が完成しました。

反射炉本体は、耐火煉瓦で築かれており、数種類の煉瓦が使用されているが、水戸藩領内の<sup>こいさご</sup>小砂(栃木県馬頭町)の粘土を主原料としています。高温に耐える耐火煉瓦の製造が、反射炉の成功の鍵であり、小砂産の良質粘土が成功に導いたと言えます。

反射炉跡敷地の距離や建物の配置などが記載された「湊村反射炉場所絵図」が残っており、この絵図によると敷地内に瓦細工所・瓦釜場と記された建物が描かれていることから、敷地内で煉瓦の製造が行われていたと考えられます。

円柱状の砲身は、<sup>すいしゃば</sup>「水車場」に運ばれ、水車の力を利用して砲身をくり貫いて完成させました。水車場は、反射炉より西方に約1.5km離れた柳沢の中丸川下流右岸の那珂川の合流する近くにありました。

国防に力を注いだ<sup>えいちつきよ</sup>齊昭公でしたが、安政5(1858)年の「安政の大獄」で永蟄居となり、大砲の鑄造も一時中断してしまいました。その後、文久2(1862)年に大砲鑄造が再開され、元治元(1864)年まで大砲が鑄造されました。那珂湊反射炉が操業できた期間は短く、製造された大砲の数は、全部で20数門といわれていますが正確な数は不明です。

反射炉建設とともに、太平洋沿岸の台地上に砲台である「台場」を築造し、台場近くに異国船を監視する番所を設置しました。この台場に大砲が設置されたほか、幕府にも献上されました。

齊昭亡き後の水戸藩内は、<sup>げんじかつし</sup>尊皇攘夷派と保守派が分裂して争い、元治元(1864)年、元治甲子の乱(天狗党の乱)が起り、反射炉は破壊されてしまいました。

#### ◆ 復元模型の製作

那珂湊反射炉跡には、地元の有志によって昭和12年に復元模型が完成しました。復元には敷地絵図を基礎資料として、当時の煉瓦を用いて実物に近い形に復元され、往時の姿を偲ばせています。

平成16年11月に、5,315㎡が茨城県指定史跡に指定されています。